

千歳ラグビー事始め 相馬君との山形の一夜より

第4期 佐藤宗男

一つの事を始める時の熱気と云う物は今五十年をへて思い起して見るとまったくまるで狂気としか云様のない様々なあの行動に夢中になれたのは何であったのかとつくづく考えてしまいます。

昭和二十一年四月始めと云えば前年八月敗戦からまだ一年もたたず日本全体のいたる所の都市が戦災による焼跡と瓦礫の市街と化したままで食糧を始め生活物資の払底と加速度的に昂進するインフレ・失業の増大等、世の中まさに生活の疲弊と人心の退廃と混乱を絵にした様な状態。学校だとして戦時中に使われていた教科書は理・数科系を除いて特に日本の歴史に関係のある文章は墨で塗りつぶさせられて物の用にもたたず更に教育方針に至ってはまるで針が狂った磁石盤同様指針も定かでなく、新学期開始の日時も確定せず二十年度三学期末に一部進学した人々の卒業式(戦時中に四年で卒業となった為)も二十年敗戦後校長を辞職された本村伝吉先生の後任の校長先生がきまらず在校生の状態を見れば戦時中志願で入隊した海軍陸軍の各種学校(兵学校・予科練・幼年学校・飛行兵など)からの復学者が何となく巾をきかせて先の目標もなく行き場のない不満を漲らせて、時々爆発させては廻りに害をまきちらし測杖をくった者こそいい迷惑と云うありさま。

俺自身春休み中と云って家にいてもとりわけ何をやる事もなくまして食べる事にも不足だらけの東京の生活から逃げ出す事にして一人旅と親父・お袋の里の山形に行くと言えは聞えはいいが何の事はない田舎の方が東京よりいづらか食べる事が楽だろうと思っの事。

上野からの夜汽車に乗るにも朝の八時九時から並ぶ人の列におつきあいして延々十二、三時間以上もかかってようやくの乗車、しかも座席に座る事も出来ずデッキ立ちっぱなしの道中の七時間余りの何とつらく長い時間だった事か。山形と云っても更に支線に乗っての終着駅の〇沢なる典型的な田舎町であるお袋の里にまず居所をきめて親父の里をはじめ周辺の親戚をたずね泊って歩くのが日課の様な気ままな生活。唯四月とは云っても暦の上でこそ春だが「みちのく山形」路は町中の雪はないものの回りの山々の雪はまだ冬の最中寒さは一人前の季節。日数を過ごす間に寒さにも何とか慣れて来た或る日フツと学期末に耳にした相馬君の「俺もまだ寒い山形に帰るよ」と云っていた事を思い出して山形市鉄砲町のお住居(戦時中空襲による戦災で新宿の工場と共に調布より疎開されていた)をたづねた。

普段は親爺・お袋の里の町の汽車の乗換駅の大きな市街としての印象しかなかったが、戦災を受けていない為もあり早春の陽光に映えて何と清潔で新鮮な雰囲気街だろうと一驚する。さっそくおしえられていた所番地と地図をたよりに時々人にたづねながらの初めての道の遠かった事。山形市内とは名ばかり市街地の家並みのはずれにようやくたづねあてた。

昭和十九年戦時中のさなか勤労働員で軍需工場に行っていた折にまだ調布においでの時たづねて行つての一別以来の再会。御家族の方々も山形の生活にもなれて皆さんお元気な様子なによりだった。

その夜「せっかく来てくれたのだから是非泊って種々な話もしたい」とのお言葉に甘えて、夕食をいただいて

から彼の部屋で、三学期に発表になった運動部創設について野球部・排球部(バレーボール)・庭球部(テニスボール)・蹴球部(アソシエーション・フットボール→サッカー)等五年生は特に進学のためもあり主として四年生以下の在校生を対象としたものとしてあるが、彼(相馬君)は「自分は蹴球ならば是非ラグビー・フットボール部を創設したい」と又「ついてはその為に種々準備したから見て意見を聞かせてほしい」とラグビー・フットボールに関してのルール・ブックからスポーツとしての発祥・歴史など一般的解説を記した文献を始め、他に部員の為のジャージーのカラーイラストを含め入部の勧誘対象とする者の人名(主として五年生)、予定ポジション、更に部の創設に至る手順、日限部活動が開始されてからの練習の方針・方法・おおよその日程と目標に至る迄を詳細にまとめたノートを前にして切々と語るのを聞きあらためてラグビー部創設と運営に対する熱情に感じ入ったものです。

更に話はすすみ日本でのラグビーの歴史を語る中で戦時中の海軍の予科練(彼自身入隊していた)でも闘球と云う型で体育訓練の内に組込まれていた事、現在迄の大学・高等学校・専門学校(旧制)に所属するラグビー部の活躍状況と順位等、しかしまだ中学校では全国的にも又東京でさえも一部の私立校をのぞいて野球部程の普及迄には至らず今だからこそ是非他にさきがけてラグビー部創設の一大チャンスでありなканずく(就中)ラグビー発祥の地英国でも「ラグビー・スクール」なる、ミドルスクールの一少年の行動が端緒となって生まれたスポーツであり、特に英国紳士教育の育成にも大変重大な要素として取入れられているスポ

ーツで、まさに男の為のスポーツであるとの話を聞かされ、「ならば俺も是非入部したいがどうだろうか?」と云うと彼はあらためて小生の体を見て「お前は体も小さいし、体力的にレギュラーは無理じゃないか」との事。「だが俺も小学生の時から近所の成蹊学園のグラウンドでよくラグビーの試合や練習を見ていると、小さい体のメンバーがスクラムのそばについてボールを入れていたのを見た記憶がある」と云うと「まあお前の役目はグラウンドの廻りの仕事もいろいろあるからマネージャー(とは聞こえがいいが早く云えば取巻きの雑用係)の方が!」との事であり良い気分とは云えないがラグビー部創設と運営にたずさわる事が出来ると云う事で我慢する事として、まったく一夜にしてはやり病に伝染した患者よろしくラグビー熱にとりつかれ心の高ぶりがフツフツと大きくなってゆく様な感じでした。

さあそうなるとなんとも山形の田舎町の生活がうとましく話にならず四月末親爺よりの「学校再開登校のためいそぎ上京しろ」の電報で上京。五月始めより登校して級友の誰、彼と「元気、おたがい無事でなにより」の挨拶もそこそこにさすがに相馬君はさっそくラグビー部員対象者として海軍の予科練より復学した級友に声をかけるのを手始めにまさに「人狩り」よろしく五年・四年を始め在校各学年の生徒の中で体格の良い者、体の動きの良い者、更にラグビーに興味をもっている者にと声をかけて入部勧誘。更に口コミによる部員募集をしてともかく部員数の確保につとめる(早く部員を確保しないと他の部に入ってしまうと云う心配もあるため)。

学校に対しては「大変過激で危険なスポーツである」として正式に許可されていない運動部である為、まず

その許可を得る為に「ラグビーと云うスポーツに参加したい」と云う者が何程の人数になっているか(部員数の確保の実績)更に数少ないラグビーに関係のある先輩の方々を始め校外の運動に関係のある方々の御意見をうかがって五年生の有志部員十数名の意志統一を計ってから新任の降旗校長先生にラグビー部創設許可を訴えるため校長室をたずねて「現在の大変退廃的世相の中での生活の方が如何に精神的に危険であるか、その弊害防止と教育の補助のためには多少の危険はあってもかえってメンバーとしての団結と相互意志の疎通によって切磋琢磨されるのではないのでしょうか」と請願してようやく許可をいただき何とか正式にラグビー部を発足させて卒業迄の残り少ない一年に満たない数ヶ月、部としての活動を盛り上げ成果を後に続く人達に残す事をめざして夢中で動き廻った事でした。

勿論その間学校の諸先生方の御理解と御指導を始め五期生(四年生)以下後輩部員諸氏の団結と協力又特に相馬君の御父上の有形・無形に広くおよぶ御力添えと指導・鞭撻を四期生卒業後もいただいた事には深く感謝の意を表すものです。